

新生児集中治療部(NICU)

Neonatal Intensive Care Unit

新生児集中治療部長
平家 俊男



エビデンスに基づく 高度な新生児医療を提供

新生児集中治療部(NICU)と周産母子診療部(未熟児センター)は、周産母子診療部(分娩部)と協力し、24時間体制で診療を行っている。社会保険のNICU認可を取得したのは2003年度と比較的新しいが、現在では京都府の中核施設のひとつとして、超低出生体重児の他、外科疾患・心疾患など他科との連携を要する重症な児の治療を積極的に行い、地域医療に貢献している。また、2010年度 NICU9床、GCU12床へと増床し、地域における重要性は年々高まっている。一方、新生児専門医の基幹研修施設、未熟児新生児医療研究会および新生児内分泌研究会を主宰し、教育・研究の要としても高い評価を得ている。

代表的診療対象疾患

超低出生体重児、極低出生体重児、新生児仮死・胎便吸引症候群など周産期の異常に伴う病態、横隔膜ヘルニア、先天性食道閉鎖症などの外科疾患・左心低形成、総肺動脈還流異常症など先天性心疾患、未熟児動脈管開存症などを対象としている。とりわけ、京都の基幹施設として、基礎疾患を有する母体からの出生児、外科・心臓血管外科など他科との連携を要する疾患に関しては、より積極的な受け入れを行っている。そのためより重症である超低出生体重児、極低出生体重児、先天性心疾患の入院数は年々増加している。脳低温療法、一酸化窒素吸入療法も行っており、重症新生児仮死や肺高血圧にも対応している。

業務内容の特徴と実績

超低出生体重児や重篤な疾患に対応

年間入院数は150~160人となっているが、重症患者の入院が増加している。京大病院産科婦人科で妊娠経過を診られていた合併症母体、緊急母体搬送後の院内出生が75%程度であるが、京都府周産期情報ネットワークにも参加し、他院からの新生児搬送も近年増加傾向にある。超低出生体重児、極低出生体重児の入院は年間30~40人となり増加傾向にある。ここ数年の極低出生体重児の救命率は95%を超えている。超低出生体重児の救命率も90%を超えており、染色体異常や重度の心疾患を有さない児の救命率はほぼ100%となっている。また、頭蓋内出血や脳室周囲白質軟化症の頻度は極めて低く、救命し得た児の多くがインタクトサバイバルしている。先天性横隔膜ヘルニア、食道閉鎖症、小腸閉鎖、ヒルシュブルング病、先天性気管狭窄など重篤な外科疾患も積極的に受け入れ、小児外科と連携をとって診療にあたっている。

心臓血管外科小児部門および小児科循環器グループの充実に支えら

れ、ここ数年、先天性心疾患の入院数は増加している。動脈管開存症を除く先天性心疾患の入院数は年間30~40例となっている。また、低出生体重児で動脈管結紮術を受けたもの(他院からの結紮術依頼入院も含む)が10例程度となっている。さらに重症新生児仮死に対する脳低温療法も行っている。退院後のフォローは小児科にて行っている。



臨床研究の取り組み

新生児期の内分泌の諸問題や発達を研究

臨床とともに新生児の副腎機能、甲状腺機能など新生児内分泌を中心とした臨床研究や、発達に関する研究に精力的に取り組んでいる。「新生児内分泌研究会」という全国規模の研究組織の中心として活動しており、最新の研究成果を発信している。2009年、2011年度には甲状

腺ホルモン製剤と副腎不全に関する全国調査、および高インスリン血症低血糖症に関する全国調査を行った。

また、京都大学教育学部(明和政子准教授)のERATO研究・新学術領域研究の研究推進施設として、新生児の情動発達研究を行っている。